

# 木村素衛教授の生涯と業績

前 田 博

## 1. 生い立ち 哲学を選ぶまで



フィヒテの「全知識学の基礎」の訳者序の中で木村教授は若きフィヒテの生活を述べるに当ってこう書いている。『貧困は彼れの青年期と離れない友でもあり運命でもあった。それとの不断の戦を通して彼れは自己をよりよきものへと鍛煉して行かなければならなかったからである。実際、彼れを貧困に生み落した自然は同時にこれと戦う鉄の如き意志と向上への火の如き要求とを彼れの内に生みつけて置いたように見える。』これは或る意味では若き木村教授の自画像でもあった。或る日の日記に少年の頃を回想して次のように書いている。『……鷺尾町へ這入って行く。大分新しく家が建ちなおっているが、思いがけない事には、私達が生活したあの家があった。外からみたところ二階の南向きに木で造った格子窓めいたものが見えるで、入口や何かそのままである。足かけ30年の昔になる。私が中学の2年生、16歳だったかと思う。この年から牛乳配達が始まった。……私は歩き乍ら色々な事を思い出していた。あの頃はどん底だった。私は貧乏と戦う事に、しかし力強い意義を感じた。それと戦って行く事を誇らしい事だと思った。毎朝暗い中に牛乳瓶を下げて家を飛び出す時、左様した苦悶を通して今に自分の生活が建設されるのだと思い、そして無事泰平に親の保護の下に通学している平凡な生活に対して、自分の生活の意義を内心実に誇らかに思った。私は後年屢々生活が灰色に見える事がよく起った。左様した時少年時代のこの苦闘の私の姿がよく思い出された。……この少年の想い出が起ると共に、灰色は消えて行った。あれは何の為めの努力であったか。あの痛ましい努力の過去を有つ私と云うもの、否、あの少年の続きである私と云うものが、見ず見ず崩れて行ってはならない。そういう引き立つた気持が私を幾度となく救ってくれた。……』

明治28年3月11日が木村素衛教授の誕生の日である。「雪解」の中の「郷里」という題の随筆の始めにこう書かれている。『北国の海岸、加賀の橋立と云う村の船持の家に私は生れたが、明治初年の移り変りの激しい世の中へ船を乗り入れそこなって、私のもの心づく時分には、そこから一里半ばかり離れた大聖寺と云う町に住んでいた。その小学校で13の夏まで育った。その時父は北海道へ去り、私は母や祖母や弟と一緒に京都へ移住することになった。』こうして父の事業の失敗のあと母は針仕事をして家計を支え、この少年は牛乳配達をして学資をかせぎ京都一中へ通ったのである。中学では特待生として授業料を免ぜられるほどの秀才であり、その上ポート

や柔道その他のスポーツを盛んにやった。大正4年に三高に入ったが間もなく病気になり、3年間に病床で送り、寝ている間に独逸語を勉強し、哲学書を読んだ。そして大正9年9月京都帝国大学文学部哲学科選科に入学し哲学を専攻することになったのである。哲学科の諸教授特に西田幾太郎教授には生活上の問題についても行きとどいた配慮を受けているが、天分を認められ嘱望せられ、そのことが励ましとなって学生時代からよく勉強した。その日記の一節には『私は唯先生の期待に反しない様に一生懸命にやりたい』とあるが、これが学生時代ばかりでなくそれ以後ずっと木村教授を支えていたものであったらう。

さきに少年時代の家庭の貧しさの中での苦闘について述べた。京都大学の学生時代にも経済上の苦しみは小さいものではなく、東寺大学の哲学と心理学との講義を受けもったりしたのもそのためである。後に広島文理科大学へ赴任してからも、広島の自分の家と母や弟妹の居る京都の家と両方の家計を支えなければならない貧しさと戦っている。貧しさだけではない。木村教授は健康に恵まれていなかった。昭和4年の或る日の日記に『自分は極めて普通人の普通の健康さえあれば何も云う事はない』と記しているように、絶えず病気と戦いながら研究をつづけた。青年時代の長い病臥、京都大学へ赴任してからの長い病気、それは意志の強い人のきびしい節制のみが克服することのできるものであった。しかも教授の風格はまことに明るくそして闊達であつた。そのことと教授の芸術家的な天分や性格とは無関係ではあるまい。「美のかたち」において、『美しい作品や美しい景色が心を引きつけ始めたのはいつの頃からであつたか、ともかくそれは随分幼い頃からであつた……』と云い、花を愛し自然に眺め入り、子供の心の美しさに感動する繊細な感受性の持主であつた。公にされた二冊の随筆集「草刈籠」及び「雪解」はもとより、他人に見せるつもりもなく書かれた日記にもこのことがよくうかがわれる。そしてまた『小学校にいた時分から私はしばしば絵具を郊外へ持ち出した』と書いているように、「描くこと」も青年時代はもとよりずっと後までつづいている。昭和4年秋の日記にはこう書いている。『……せめて1ヶ月、何も義務のない日が与えられたら。そしたら私はいっぱい研究したいものがある。哲学だけでは勿論ない。美学も、そして芸術作品も、それから色んな書物も。そして又、一生懸命になって15号位を2枚も3枚も描くだろう。……』スケッチのいくつかは随筆集に入れられた。然しまた『その美しいものが一体どういう本質をもち、どういう原理に基いて成り立っているのであるか、』そのような美の本質や原理に関する探索も早くから始まったのであるが、カントの「判断力批判」が手がかりになって美学に関する論文もいくつか書かれ、昭和16年には「美のかたち」が出版された。

## 2. 独逸観念論の研究

学生時代にはこのようにして、生活上の苦勞を嘗めながらも、自然や芸術の美を楽しみ、親しい友人と交わり相励まし、時には坐禅をして自らに鞭うちつつ、哲学の研究に専念した。主として独逸観念論の研究であつて、その頃の勉強ぶりは、『4年前から第一批判を読み初めて、四五

#### 京都大学教育学部紀要 IV

回もくり返して来ているが今漸くこの演繹論の隅隅迄も明かになった……』という大正11年秋の日記にもその一端がうかがわれる。大学の2回生の時にはヘーゲル哲学の考察「含蓄から顕現へ」を書いて西田教授に提出したが、これは後に(大正13年11月)手を加えて「思想」に載せた。卒業論文はカントについての研究であつて、その一部分は「哲学研究」に載せられた。「カントの NOUMENA と先験的自由とに就て」(大正12年6月)である。大正12年大学卒業後は、京都高等工芸学校や大谷大学、第三高等学校等に勤め、その間に引きつづきカント哲学に関する研究を発表している。即ち「カントに於ける der transszendentale Gegenstand と“affiziert werden” とに就て」(大正14年1月)や「カントに於ける具体的普遍」(大正15年1月)であり、「カント美学に関する一考察」という副題の附せられている「観ることと作ること」(昭和3年1月)もこの時期の作品である。またカント著作集の翻訳を分担し、「世界公民的見地に於ける一般歴史考」及び「人間歴史の臆測的起源」を大正15年2月に訳した。

フィヒテについても在学中から精読し始めていたが、特に「全知識学の基礎」を大正14年の夏から読み出した。たまたま大正15年から2カ年つづいて田辺元教授の演習にこの書が用いられたのを機会にこれに出席した。そして田辺教授のすすめにより岩波茂雄氏の委嘱を受けてこれを翻訳することになった。昭和4年4月広島文理科大学に赴任したが、新しい任務の多忙の中で訳稿を更に吟味し、「5カ年の辛苦」の後に、昭和6年1月に出版した。この翻訳は日記に記されている通りまことに「辛苦」であつただろう。然しまたそうして精読し検討することによってフィヒテの根本思想をはっきり把握し、しかも独自の解釈や研究を進める機縁になったことも事実であろう。このようにして木村教授はフィヒテの哲学と離れ難く結びつき、フィヒテの研究を通して自らを豊かにして行くことになったのである。直接フィヒテを扱ったものとしては学位論文の一部である「フィヒテ」を始め、「フィヒテの理論哲学」や「国民と教養」等があるが、そのような一連の研究の萌芽として「理論と実践—フィヒテ哲学の根本思想—」が昭和5年11月に書かれている。これはもと朝永博士還暦記念論文集に載せられたものである。副題の示すようにフィヒテに関する考察であつて、昭和12年に出版した「フィヒテ」は『この試論を原案として考え進められた』と自ら述べている通り、木村教授のフィヒテ研究史において重要な意味をもつ文献である。

シェリングに関連しては「自己同一」(昭和10年9月)があり、ヘーゲルに関してはさきに挙げた「含蓄から顕現へ」のほかに、「ヘーゲルに於ける芸術美のイデー」(昭和6年9月)がある。このようにカントやフィヒテやシェリングやヘーゲルなどは、木村教授にとっては学生の頃から晩年に至るまで『依然として良き師であり、不断に反省や激励や支持を与えつつ』さまざまな意味において教授を導いて行つたのである。このことはやがて述べるであろうように木村教授の教育哲学の体系である「国家に於ける文化と教育」の骨格をなすものの一つが独逸観念論の哲学であつたことに顕著にうかがわれる。

昭和4年4月広島文理科大学に赴任し、昭和8年5月京都帝国大学に転任するまでの4年間は

## 木村素衛教授の生涯と業績：前田

広島で過した。当時の日記にもうかがわれるように、そして京子夫人の後記にも記されているように、『広島の4年間は実に実によく勉強した。』そしてその勉強の中心はフィヒテであったと思われる。京都で翻訳した「全知識学の基礎」は広島に行ってから再吟味せられ整理せられて昭和6年に出版せられたが、その精読に基づいて丹念にフィヒテ哲学についての検討がノートに書き込まれて行った。やがてそれは学位論文として実を結び、「フィヒテの理論哲学」としてその一部をうかがうことができるようになった。とにかく広島時代にはフィヒテについてまとまったものを書き上げるということが大きな目標であったことは疑えない。昭和6年12月11日の日記には、『一昨日から、学位論文の準備と云う目標の中に研究を始めた。出来たら1ヶ年間位に未読の文献を読み、あとの1ヶ年位で書き上げ度いと思う。フィヒテを主題にする』と記されている。また後に出版された「独逸観念論の研究」によれば、『昭和8年の正月前任地広島で相当大部になる見込でフィヒテ哲学の考察を書き始めたが、その春京都へ転任し、新しい公職上の課題のため色色と苦勞の多い心境のままでお稿を進めていた。翌年2月、初期の理論哲学の考察を一先ず書き上げたとき健康を害し、稿はそのままになって了った。この旧稿のうち一部分は上記「フィヒテ」に収められ、特に理論哲学に関する部分だけが長くそのままになっていたのである。』「フィヒテの理論哲学」がその部分にあたるのであって、これは後にいくらか手を加えて「独逸観念論の研究」に収められた。右に記したことから明かであるように、昭和6年末から計画を立て昭和8年正月に書き始めたフィヒテ研究は、一部は学位論文としてまとめられ、一部は「フィヒテの理論哲学」として発表せられたのである。

昭和15年3月13日、文学博士の学位を授与された。その学位論文「実践的存在の基礎構造」は「教育哲学の考察に向けられたるフィヒテ哲学の一つの研究」という副題が附せられているように、フィヒテ哲学の研究であり、特にイェーナ期の知識学に対する基礎的研究であった。論文は7章に分れ、そのうち6章までを「フィヒテ」と題して昭和12年9月に出版した。これはさきにも述べたように昭和8年正月から書き始めていたフィヒテに関する研究のうちその年の前半期に書き上げたものに、昭和11年秋から昭和12年春にかけて書いた第5、第6の2章を加えたものである。「フィヒテ」には含まれていない学位論文の第7章は「教育哲学に対する基礎と展望」と題されていて、木村教授の教育についての最初の論述として注目されるべき著作であるが、幸にして昭和23年に出版せられた「教育と人間」に収められている。「フィヒテ」の第5、第6章と同じく昭和11年秋から昭和12年春にかけて書かれたものである。なお学位論文と「フィヒテ」とは右のような本文のちがいのほかに、その性質上、学位論文の序の第2段は「フィヒテ」では省かれ、学位論文にはなかった1段が「フィヒテ」の序では最後の段として付け加えられている。

昭和8年5月11日京都帝国大学助教授に任ぜられた。小西重直教授がその年総長に就任したため、教育学教授法講座担任予定者としてその年から特殊講義を受けもつことになったのである。こうして再び京都の生活が始まった。広島での研究がみのり始めたときであり、学問への情熱と抱負との高まってきた時であったので、教育学の研究という新しい職務や思いがけぬ長い病臥が

木村教授を苦しめた。学位論文はそのような状況の中で書かれたのである。

### 3. 表現的生命の理解

このようにフィヒテの研究に打ち込んでいるときであったので、昭和8年京都大学へ赴任した年の特殊講義は「人間学としてのフィヒテ哲学」であり、昭和14年講座担任を命ぜられて演習を受けもつようになって先ず用いたのはフィヒテの「学徒の使命」であった。ところでその頃、教育学についてはどのような構想の下に研究が進められて居ったかは、昭和10年の特殊講義の題目がこれを示唆しているように思う。即ち「文化教育学の基礎的研究としての人間学的構造論」というのであって、当時は病氣中であつたため講義そのものは単に予定たるにとどまつたのであろうが、教授の構想をうかがうに足るものである。「教育と人間」に収録せられている昭和14年頃の講義案を見ると、人間学としての教育学の構想が巧みに展開せられている。昭和11年10月5日の日記に、『今日から私は本年度の講義を初める。一学期以来カントの Pädagogik を講読していたが、今日から1時間を読み、他の1時間を講義にした。1時から3時迄。「人文主義と文化主義」と云う題』とあるように、この頃には健康も恢復してさきに述べたように学位論文の仕上げにとりかかった。

ところで木村教授の指摘するところによれば、実践的存在の基礎構造を明かにする上に、フィヒテの初期の哲学には少くとも三つの重要な事柄が取り残されている。その中の二つの点については後期における思想の深まりにおいてフィヒテ自身から一つの解答を与えられることを期待することができるかも知れない。これについては後に述べることにする。『併し第三に指摘すべき自然に関しては、恐らくこう云う期待は全く持ち難いように見える。フィヒテに取っては自然（非我）は一面において実践的自我に対する障碍であると同時に他面この障碍を克服して自己を表現的に形成する自我の質料としてこの形成の実質的支持者であつた。自然は彼れに取ってはかかる二重の役割を演ずるものであり、そうして決してそれ以上の何ものでもなかつた。独り初期の思想がそうであつたばかりでなく、彼は終世自然をかかるものとして見て行つたものである。併し自然は却つて人間を養うものではなかつたろうか。単に障碍するばかりではなく、却つてまたいのちに活動を促し人にいざないかけ啓示し啓発しまた指導さえもするものではなかつたろうか。すべてのいのちあるものにとってそうであるように、人間の実践に取つても亦自然は文化を産み且つ育てる大地の母ではなかつたろうか。……』このようにフィヒテ哲学の限界について語る思想的立場が木村教授に既にひらかれていたのである。ところでこのような自然或は形成についての独自の見解がやがて洗煉せられ系統づけられて木村教授の文化哲学・教育哲学の重要な基礎となるのであるが、そのような考えのめばえは若い日にさかのぼる。フィヒテの翻訳についての「五ヶ年の辛苦」が示しているように、一つの論文にもその背後に長い年月の思索と推敲とが存していたことの一つの例として「一打の鑿」について記しておきたい。

昭和6年3月21日の日記にこう記している。『……「一打の鑿」と云うものを私はいつか書こう

と思いついた。私の生命をそこへ表現しよう。私はカント、フィヒテ、ヘーゲル—それらの人の後にかくれてひそかに今迄自分を語って来た。「一打の鑿」においては一切の仮面をかなぐり捨てて。私の生地一つを露呈しよう。彫る人が髓一閃、一打の鑿において動く生命を解き開く事によって生命の神秘を明かにするのだ。恐らくこの鑿において見る目を考えついたのは31の春であつたらう。谷大へ初めて赴任して何か講義の一部で苦しんでいる時の事であつた。私は「一打の鑿」において思索者としての私が死をも悔いない程の全表現を望む。嗚呼この一打の鑿よ 悉皆成仏……』このように31歳の春に考えついて心の片隅でたえず暖めつづけて来たのである。そして昭和6年秋には西田博士にその考えを書き送っている。11月8日の日記には、『……西田先生から御手紙をいただいた。……「一打の鑿」と言うものを書こうかと思っていると、その中心点を一寸洩らしたら、それを大層面白い事に思われての御手紙だった。……』と記されており、同じく11月15日の日記には、『……「一打の鑿」をいよいよ書かねばならない。今月中にと精神科学が云う。不健康を背負い乍ら永永とかかっていたハイデッカーの「カントと形而上学の問題」はとても興味深く昨夜読み終ったので今日は一打の鑿の考案をしようかと思っていた。……』と記している。こうして「一打の鑿」は「精神科学」（昭和7年第1巻）に発表されたのであるが、それには「制作作用に関する一つの覚書」という副題が付けられている。さきに引用した日記には『嗚呼この一打の鑿よ 悉皆成仏』という句が二度繰返されているが、これは「一打の鑿」の初稿にも、「表現愛」に収められている分にも用いつづけられている。ところでこの初稿「一打の鑿」には1931年（昭和6年）11月23日の日附が附せられているが、12月14日夜の日附の追記では、校正にあたって感ぜられた不備の諸点を自ら指摘しつつ、「これらの点に関する更に詳細なる考えは今許された追記の頁へ盛ることはできない。私は不備のまま兎に角一つの覚え書としてこれを発表する』と記していて、やがて修補せられることが予想されている。思索と推敲の成果はやがて昭和8年6月「制作作用の辨証法」となつてあらわれ、始め「思想」に載せられたが後に「表現愛」に収録するにあたって「一打の鑿」と題し、「制作作用の辨証法」を副題とした。ここで展開された制作作用の構造についての分析がやがて「表現愛」を貫く独自の立場を準備することになるのである。自然や文化についての見解もこうして系統づけられて行った。

学位論文或いは「フィヒテ」において木村教授はフィヒテ哲学の限界、というよりももっと広く理想主義そのものの限界を指摘している。そしてそこでは初期のフィヒテ哲学を批判する高次の立場についてはただ消極的示唆的に語っているのみである。それを積極的に展開したのが「表現愛」であつた。さきに西田教授との関係について簡単に記したが、木村教授の思想の根柢をなすものは西田哲学の研究を通して形づくられて行つたと云えよう。そして木村教授をはげまし支え導いてきた独逸観念論の哲学も—それについては既に早く昭和10年9月の日附のある「自己同一」の結びにおいて、そこから東洋的な無へ進まざるを得ないことを述べているが—その限界の故に単に無視し滅却するという意味で超えるのではなく、そのような高次の独自の立場から包み取られて行つた。木村教授の教育哲学の基礎もそのようにしてかためられて行つたのである。

では形成とか表現とかいうものを木村教授はどのように把握したのであるか。一般には『内なる形相を、表現的主体において見られているアイデアを、外を克服することによって実現することが形成的表現に他ならない』と考えられている。ここにイデアリスムスの立場がある。ここでは従って『文化とは、表現的主体即ち自我のアイデアを、素材としての自然を征服することによって実現することを意味する』と考えられている。ところが木村教授は外を単なる素材性において捉えないで、呼びかけるものとして捉える。それは単なる素材的外でもなければ、理論的対象としての単なる観想的外でもないのである。表現的外は呼びかけるものとして汝的外である。これら三者は次のような聯関を構成している。即ち『それは観想的外を止揚契機として含む素材的外を更に超えて、このものをも止揚契機として含み取っている高次的外にはかならないのである。それ故、汝的外は低次の自己限定によって自己を素材的外へ抽象化することができ、このものは更に低次の自己限定によって観想的外へ自らを抽象化することが可能であるといわなければならない。』表現的主体はそれ自身としては、いのちなき素材的自然に自己を刻み込むことによって、表現的主体であるのではない。主体は語りかける外に対して応える内として初めて本来の意味における表現的主体性を獲得するのである。表現的世界というものも主体と環境とのかかる聯関において初めてその本来の意味において成立するのである。ところで表現的世界の契機としての主体が応えるということは併し形成するということでなければならない。外からの語りかけという限定を媒介にして却って形成的に内から外を限定し返すこと、それが主体が応えるということの意味である。イデアは主体の単なる自発性から生まれるものではなく、従ってイデアを単に内の自発的自己限定として考えることは誤りでなければならない。『表現的存在は本来内と外とを相互的な表現的契機として所有し、両契機の互の表現的な辨証法的媒介に於てみずからを形成的動態において維持するところのものであって、人間的個的主体はかくの如き辨証法的媒介の自覚点に他ならない。』表現の原理的構造についての考察はこのようにして表現的内と外との十全な把握に進ませ、学位論文において提出した問題にはきりと答を与えることができた。形成的表現をこのように解するならば文化の本質についても新しい見方が示唆されることは自然であろう。即ち文化の本質は自然に対する人間の形成的征服に在るのではなく、『文化の本質は、内と外とを相互に表現的な契機としてみずからを自己形成的に動かして行く歴史的自然の内においてその営みを人間的主体が自覚的に育て成して行くことに在るのでなければならない。』これが「表現愛」において到達した文化についての見解であるが、それがやがて「文化の本質と教育の本質」につらなるのである。

昭和15年12月の日附で「美のかたち」の中に、「此数年来思索の関心はその中心を一層広く表現的生命の理解につないでいるのである」と述べているが、前年昭和14年に出された論文集「表現愛」も、そしてまた翌年昭和16年に出された論文集「形成的自覚」も、そのような問題についての探索の成果にはかならない。木村教授にとって「表現愛」はたしかに自らの哲学の礎石という意味をもつものであった。『私にとって探索は何等の意味においてもその到達点に来ているの

ではない。唯併し今迄の道程を顧みるとき、私は自分の道にいつの間にか歩み込んで居り、兎に角この道を歩み進むことが自分の道を行くことであると云う程の感じはするのである』と語っている。そして「表現愛」において考察せられたことが教育学の諸問題に対してその原理的研究と云う意味をもつとも述べているが、そのことは逆に云えば木村教授の教育学の礎石が置かれたということにはかならない。じじつ、昭和16年の「形成的自覚」においては、『表現愛の立場から、それを具体的に展開することによってさまざまな特殊問題へ出て行くということが、この数年間の私の思索的関心の中心問題であるが、殊にこの立場から教育に関する理解を押し進めそれを体系的に把握するということは、大学の講壇における私の課題でなければならなかった』と述べている。例えば表現愛におけるエロスとアガペーとの統一は教育愛の本質に深い洞察をもたらした。技術についての考察は教育という「人間に対する形成作用」の研究に対しても重要な手がかりをもたらした。京都大学における特殊講義「実践の場の構造と教育的愛」（昭和12年）「意志と愛」（昭和13年）「自覚における内在と超越—人間育成の本質的意義—」（昭和14年）もこのような関心や努力のあらわれであった。昭和14年頃の講義案をみると木村教授の教育学の体系が既に完成に近づきつつあることが見られるが、「形成的自覚」そのものはしかし「体系的展開」を志しているのではなく、短論文の蒐録である。『この論文集は「表現愛」からこの準備中の一書に至る過程的期間において、折にふれて作られたいわばトルソや部分的な型試作の集まりなのである。』それはとにかくとして、「形成的自覚」が二つの重要な論文を含んでいることを見逃すことができない。「文化の本質と教育の本質」及び「国民教育の根本問題」である。

#### 4. 教育哲学の体系

昭和14年秋の京都哲学会で木村教授は「文化の本質と教育の本質」（昭和14年11月1日）と題して公開講演を行った。この論文は間もなく「哲学研究」に載せられ、後に「形成的自覚」に収録された。これは木村教授の教育哲学の第二番目の、然し独自の立場とまとまりとをもって来た意味では最初の、重要な文献である。これと並んで同書に収められた「国民教育の根本問題」（昭和15年10月）は昭和15年秋文部省の日本諸学振興委員会の教育学会で発表したものであるが、前者において触れられなかった国民文化と国民教育とに関する原理的な考察である。この二論文に展開された根本思想はまさに木村教授の教育哲学の体系を織り成す経と緯とであると云うことができよう。何故ならば前者から昭和16年に「文化の哲学と教育の哲学」がまとめられ、後に「国家に於ける文化と教育」の前篇を構成することになり、後者の立場から同書の後篇が展開せられて右の前篇をも包摂止揚し、極めて体系的な教育哲学が成立することになったからである。

先ず「文化の本質と教育の本質」をみよう。木村教授がカント、フィヒテにおける文化の把握に対して「表現愛」の立場から独自の文化把握のみちを開いたことは既に述べた通りである。この論文はその具体的な成果であり、そこから独自の教育論を述べたものである。木村教授によれば、教育とは人間を作ることにかならない。みづから人間性を開発し実現することのできるよ



うな実践的人間を作ること、それが教育の本来の仕事でなければならない。ところが文化とは人間性の実現にほかならないと考えられる。広義における人間の行為が文化を産みだす。文化はこの意味において人間の作ったものであり、この点においてそれは自然から本質的に区別せられる。さてそうすれば、教育は人間を作り、そして人間は文化を作る、という聯関が成立して来なければならない。文化の根柢には教育が横たわっているのでなければならない。文化は自己の内部に自己を産みだす働きを蔵しているものといわなければならないであろう。文化は自己の内に人間を作る活動を含み、これを媒介としてみずからを作るのである。文化と教育との関係大体このように見ることができるのではなからうか。このような展望を以て先ず文化の本質は何であるか、を検討する。文化とは、主体の側から云えば、歴史的・身体的主体がその内的生命を形成的に外へ表現することにはかならない。ところが表現的主体の内的限定としてのアイデアは、表現的意志の単なる自律性に基づくものではなく、却って表現的外からの限定を媒介として辨証法的否定媒介によって内に成立するものでなければならなかった。主体が形成するということは、外からのかくの如き媒介的限定によって成立したアイデアを逆に外を素材的外としてそこへ向って技術的・形式的に実現し、かくの如くにして表現的外を逆に限定し返すことにはかならない。ここに外からの表現的呼びかけと内からの形成的応答との表現的・辨証法的な連関があり、伝統的なものと創造との具体的連関があるのである。文化はこのような動的連関によって産みだされ、作られたものは環境的伝統として外を形造り、それが更に創造的主体を表現的に限定し、主体はこれを媒介として更に外をアイデア的に限定し、かくの如くにして作られたものと作るものとの辨証法的交渉として文化は歴史的・時間において動き進んで行く。『歴史的事実には本来内に否定的原理を含み、かかる否定的原理によって成立する存在であり、内と外とを否定的媒介契機としてそこから文化を形成する。文化は歴史的事実そのものの否定的自己媒介のわざにはかならない。』ところでこのように『歴史的事実が人間を自覚的契機としてみずからを文化において形成し現わし、かくして歴史的存在としての人間の生の本質的意義は歴史的世界のうちにあってその自己形成を自覚的に育成することにあつたとすれば、教育の仕事はかくの如き育成者そのものを育成するところに成立するといわなければならない。ここに教育の本質があるのである。文化が歴史的事実の自覚的契機としての主体によって創造されるとすれば、かかる主体そのものを育成するのが教育の本務でなければならない。だから教育は文化をその底から育成し、歴史をその底から形成するものといわなければならない。天地の化育を賛ける者それ自身を育成することによって天地の化育を賛ける業、それが教育の本質なのである。』

昭和16年春に書き始めた「文化の哲学と教育の哲学」は岩波講座「倫理学」の第7冊と第11冊とに分載されたものであるが、前者には昭和16年4月8日、後者には昭和16年8月31日の日附がついている。これは、もと文化哲学の項を執筆する予定であつたところへ急に外的な事情で教育哲学の項をも執筆せざるを得ないことになったために、表題のようにこれをまとめて書くことになったと聞いている。然しこの外的な事情が却って「文化哲学」をも「教育哲学」をも興味深く

具体的なものにした。既に昭和14年の講演が示しているように、文化と教育とは不可分な連関を構成するものであったので、執筆には或る意味ではむしろ好都合であったであろうと推察せられるし、「体系的展開」の機会が与えられた訳でもあって、学界のためにも却ってよい成果がもたらされることになったのである。然し云うまでもなく、それはたまたま外的な事情がそうさせたというだけではない。既に昭和14年の「文化の本質と教育の本質」はこのような取扱いの内的必然性を示している。「文化の哲学と教育の哲学」はまさしく「文化の本質と教育の本質」の発展にはかならないのであり、「文化の本質と教育の本質」はその意味で「文化の哲学と教育の哲学」の萌芽である。

ところで「文化の哲学と教育の哲学」において木村教授は先ずイデアリスムスの立場における文化の把握をカント、フィヒテにさかのぼって精細に検討し、さきに到達した独自の観点から文化と教育の、その真実の意味と連関を明かにするみちを取ったのであるが、その場合に体系的論述の一つの下絵の役割をしたのが昭和14年の「国民と教養」である。「国民と教養」の主な目次は、

- 1 問題の提出
- 2 人類文化と教養
  - i カントにおける文化の概念
  - ii フィヒテにおける文化と教養
- 3 国民文化と教養
  - i 後期におけるフィヒテの愛の思想
  - ii 国民と教養
- 4 国民文化と世界文化

となっておって、「文化の哲学と教育の哲学」はこの中の2にあたり、

- 第1章 人類の文化
- 第2章 人類文化の立場に於ける教育
- 第3章 文化と教育 その真実の意味と連関
- 第4章 文化の根柢と教育の愛

となつて居る。そして3及び4にあたるのがこれにつづく管の「第5章国民文化と国民教育」なのである。そして第3章においては「表現愛」において取扱われた技術が教育の問題として展開せられて教授法の本質に鋭い考察が加えられ、またエロスとアガペーの連関を問題として到達した表現愛の立場から教育愛の本質を明かにしている。「表現愛」や「形成的自覚」において、その取扱った教育学の諸問題に対する「原理的研究」を具体的体系的に展開することを自らの「課題」と考えつづけてきたのであるが、今や既にその半ばが達成せられたのである。

「文化の哲学と教育の哲学」の最後に追記して、ここでは国民文化と国民教育とに関する考察を紙数の都合で果すことができなかつた、然しこれに主力を注ぐつもりであった、と書いている

が、その考察が既に成案を得て居り、出来上りつつあったことは著作年表を見れば明かである。このことについては後に触れるであろう。然しその所謂「第5章」の問題即ち民族・国民・国家・国民文化・国民教育に深い関心をいただきその考察に「主力を注ぐ」に至らしめたものは何であったか。その一つは木村教授が全力を注いできたフィヒテ哲学の研究が前期から後期へと進みこのような問題の考察を不可避的にしたことであり、いま一つは時局がそれについての原理的な反省を強く要求したことであって、しかもこの両者が離れ難く結びつき、その考察はフィヒテを手掛りとして進められた。その成果の一つが昭和14年の「国民と教養」である。

「フィヒテ」において扱われた初期の思想にはなお取り残されているものとして木村教授は三つの点を指摘した。一つは個我の究明である。『イエーナ期のフィヒテはこのものの本質の把握に於て決して充分ではなかったようである。彼れは普遍我即ち自我性に向ってしか十分に注意を集注しなかったように見える。而も個我との充分な本質的区別の意識なしに。だから偶偶個我に就て述べられても、その本質的に重要な否定的契機に関しては遂に分析のメスが切り込まれることはなかった。第二は絶対我が人間的実践の到達すべき永遠なる理念としてこの実践の限りなき行く手に立つのみであって、この初期の思想においては絶対我の構造契機的位置は遂にそこを動かさなかつたと云う点である。このことはフィヒテの理想主義的人生観の特色をいとも鮮明に際立たしめる重要な事柄ではあった。が併し眞実にその底に迄徹した実践的構造論はこの絶対的契機的位置をどこまでもかかる理念的位置に置くことで以て満足し得るものであろうか。この位置を動かすことは固より理想主義的構造そのものを根本的本質的に変革することでなければならぬであろう。而も眞実にその底に徹した実践の反省はこのことを要求しなければ止まなく見える。』第三の点については既に述べた。木村教授はこのようにフィヒテの初期の哲学に限界を見たのであるが、そのうち第一、第二の二つの点については然し『後期における思想の深まりにおいてなおフィヒテその人から吾吾は一つの解答を与えられることを期待することができるかも知れない』と述べ、適当な箇所でのこの点に関する後期への展望を暗示することを忘れなかつた。

さてそのような後期についての研究の一端を幸にして「国民と教養」において見ることが出来る。既に学位論文の第7章において初期の思想の理解につとめると共にそれを媒介として教育の諸問題を考察したのであるが、『併しフィヒテの教育思想にはイエーナ期以後大きな発展があった。ナポレオンの軍隊が独逸を蹂躪したと云う事件が教育に関する彼の考えを初期の人類文化的立場に立つ態度から一転して国民文化的立場へ進ましめたのである。』ところが当時のわが国の事情は国民や国民文化、国民教育についての深い反省、周到にして慎重な考察を要求する状態にあった。木村教授のこれに対する、黙しておれない強い関心が、フィヒテその人に対する関心と結びついて、『フィヒテが如何に国民なるものを理解したか、また祖国愛や国民の教育に就て如何なる考えを持っていたか』について書かしめるに至つたのである。この書において教授は、最初に国民文化に関する重要な問題を提出し、その解決の手掛りをフィヒテの思想発展においてとらえようとする。そこでフィヒテの思想の解剖に取りかかる準備としてカントを回顧した。既に

学位論文における研究の焦点の一つとしてカント哲学との連関の問題をとりあげ、第三批判における文化の概念においてカントとフィヒテとが最も緊密に連関するという断定に到着したのであったから。かくてカントにおける文化の概念を検討しそこからフィヒテの思想の発展を引き出した。そして初期から後期へかけての足跡を追っている。そして最後にフィヒテを抜け出でつつこれを批判し、国民文化と人類文化との矛盾の問題が如何に総合的な解決に進むべきかについての考えを述べている。もとよりここでは『専らフィヒテの理解につとめると共にフィヒテの思想を媒介としてのみ問題を考えてみた』と書いている通り、そしてまた『これらの問題に関する私自身の考えはまた別に述べる機会があるだろうと思う』と書いている通り、教授の思想そのものを体系的に展開するに至ってはいない。然しこの書物の内容の構成がやがて「国家に於ける文化と教育」の体系への土台になり下絵になったのであり、ともかくも後期の思想に触れる機会をもった点で教授のフィヒテ研究の完成への進みであり、内容的に国民教育の原理的考察の出発点をなすものとして極めて重要な文献である。教授みずからの思想の体系的展開がここでは示されていない、と上に述べたが、この書物の書かれた昭和14年頃の講義案はこの点に関してもその体系が既に完成に近づきつつあることを示している。そのような構想のあらわれが昭和15年秋の「国民教育の根本問題」である。

「国民教育の根本問題」において教授は国民教育の本質的な意味を明かにするために、先ず国民とはそもそも如何なる存在であるかを問題にする。——国民が一つの特殊として個性的存在であるということは、それ故必然的にそれが他の個性的なる国民に対してであるのでなくてはならない。しかし互に他であるこれらの個性的なものは如何にしてこのような連関に立つことができるのであろうか。そのためには両者を媒介する原理があるのでなければならない。ところで国民が特殊である以上、これを媒介する原理は先ず以って普遍であるのでなくてはならない。では人類というものがこのような媒介原理であるのであろうか。国民と人類とは然し互に否定し合い反撥し合う対立であった。人類的普遍が直ちに国民的特殊を媒介するとは考え得ないであろう。われわれの媒介原理は国民的特殊を互に媒介することによってそれぞれを特殊個性たらしめる普遍である。ところで国民と国民との相互媒介は即ちその相互の交渉である。国民間の相互のこのような交渉的關係——その全体をわれわれは世界と呼んでいる。そうすれば上の如き普遍は世界を成立せしめる普遍であるのでなければならないであろう。そして時間性を入れて考えれば上の世界の原理としての普遍はその具体性において世界史的普遍といわねべきものであることが明かである。国民は本来世界史的存在なのである。世界史的存在としての国民——これが国民の真実の意味である。人類も国民も共に抽象態にはかならない。人類は世界史的国民からその国民性を脱落することによってみずからの世界史的普遍性を喪失した抽象的普遍であり、世界史的国民からその世界史的な性格を剝奪したもので、それが即ち単なる国民にかならないのである。人類が抽象的普遍であるのに対して、国民は単なる抽象的特殊である。人類と国民とのこのような抽象性に相応じてまたそれぞれ人類の一員、国民の一員というような抽象的な個的主体が成立する。

しかし云うまでもなく具体的な個的主体はもとより世界史的国民の一員としての自覚的実践的人間であるのでなければならない。このように考えてくると人類文化と国民文化というような対立も解決せられる。真に具体的な文化は世界史的国民の国民文化のほかにはあり得ない。しかしそれは同時に世界文化なのである。具体的には国民文化と世界文化とは一つでなくてはならない。伝統と創造の問題もかくて明かにされる。即ち上のようにみてくれば今や国民的伝統の根源に徹するという事は直ちに世界史的創造に出るということと同一であり、国民の世界史的存在性という具体性においては、深く伝統に徹入するということと広く世界史的創造に発展するということとは相即的同一をなすほかないのである。ここに真の伝統に徹入するということの具体的な意味があるのである。——このような分析によって国民教育の根本問題を明かにして、当時の一面的な過激な論者をたしなめている。

このような関心は講義にもあらわれた。昭和13年以降は従来の特殊講義のほかには普通講義をも受けもって「教育学序説」を講義しているが、昭和14年には教育学教授法講座担任を命ぜられてこの年以降は普通講義、特殊講義、演習を受けもつことになった。既に述べたように昭和15年3月13日文学博士の学位を授与され、同年3月30日京都帝国大学教授に任ぜられた。そしてさきに述べたような関心に基づいて特殊講義では「文化交流の諸問題」（昭和15年）「国家と文化と教育」（昭和16年）等を取りあげ、昭和17年以降は「人間形成理念の問題史的発展」として「個人主義から理想主義へ」「理想主義から国民主義へ」等を講じた。演習には昭和15年から昭和18年半ばまではヘーゲルの *Vernunft in der Geschichte* を用い、昭和18年秋以降の演習では「近世に於ける国家思想の諸問題」について指導した。

「文化の哲学と教育の哲学」が書き終えられたのは昭和16年8月31日であるが、その最後に追記として書かれているように、国民文化と国民教育とに関する第5章がこのとき既に予定せられていて、『最初からこの章に主力を注ぐつもりでいた』のであり、『4章まではその準備にほかならない。』そしてその『第5章は併し遅くとも来春には脱稿し、他の形で以て全章を纏めて公に』しようと考えられていたのである。またそれから間もなく昭和16年10月には「形成的自覚」の中で『文化と教育とに関しては近くまとまった一書を公けにしたいと準備している』旨が書かれている。然しこの第5章が実際に出来上ったのは昭和19年の春であった『公刊の甚だしき遅延も戦争のためである。20年の春、爆撃のために組版は灰燼に帰し、僅に累禍を免れた原稿に依って再び新しく着手されて、校正刷の完了する頃、突如として終戦の日が来たのである。』このようにして、昭和20年9月7日の日附で序も書き改め、「国家に於ける文化と教育」と題したのであるが、第一刷が発行されたのは昭和21年2月15日であった。

このようにして木村教授の教育哲学の体系は完成した。第5章は「国民教育の根本問題」が提示するような世界史的立場からの文化と教育とに関する体系的な考察であって、先ず主体としての世界史的国民、国民文化の世界史的性格、国民文化と国家、個人と国家等について叙述した後、に、「政治と教育」の問題について考察する。さきに「国民教育の根本問題」において、国民教

## 木村素衛教授の生涯と業績：前田

育の根本問題に連関するものとして政治と教育との関係が必然的に問題となることを述べ、また「文化の哲学と教育の哲学」即ち「国家に於ける文化と教育」の第3章においても、教材についての考察がおのずから政治と教育との連関の全面的な問題へ導くことを注意し、何れの場合にもその展開を後の機会にゆずって深入りを避けてきたのであるが、今やこの第5章の最後の第6節は「個人と国家 哲学と政治と教育」と題されてこの問題を扱う。そして『政治と教育とが、共通の最高の理念の下に、併し相異なった固有の使命を以て互に相補う旋回的連関において如何に国家的生命の全体的な統一的発展を護持するか』を概観した。

木村教授は昭和14年秋から人文科学研究所員としても研究をつづけ、17年秋には「満洲国及び中華民国」へ出張した。また昭和17年に野上俊夫教授が退官したので6月より心理学講座分担を命ぜられ、17年度及び18年度にドイツの心理学論文の講読を受けもった。また昭和18年から評議員として尽力した。更に昭和20年9月には学生主事を兼ねることになり、10月には学生部長に補せられて、戦後の混乱の時期に学生の指導につとめたが、昭和21年2月12日旅行先で急逝した。

### 木村素衛教授年譜

|            |                                  |
|------------|----------------------------------|
| 明治28年3月11日 | 石川県に生まれる                         |
| 大正4年9月11日  | 第三高等学校入学                         |
| 5年9月28日    | 同上 退学                            |
| 9年9月8日     | 京都帝国大学文学部哲学科選科入学                 |
| 12年3月31日   | 同上 修了                            |
| 12年3月31日   | 京都高等工芸学校講師を嘱託する                  |
| 13年4月19日   | 依願講師嘱託を解く                        |
| 昭和2年4月1日   | 第三高等学校哲学概説講師を嘱託す                 |
| 4年3月20日    | 依願講師嘱託を解く                        |
| 4年4月1日     | 広島文理科大学哲学講師を嘱託す                  |
| 5年8月20日    | 任広島文理科大学助教授 兼広島高等師範学校教授          |
| 8年5月11日    | 任京都帝国大学助教授 文学部勤務を命ず              |
| 14年3月31日   | 教育学教授法講座担任を命ず                    |
| 14年10月12日  | 補人文科学研究所員                        |
| 15年3月13日   | 文学博士の学位受領                        |
| 15年3月30日   | 任京都帝国大学教授 文学部勤務を命ず 教育学教授法講座担任を命ず |
| 17年6月30日   | 心理学講座担任を命ず                       |
| 17年10月20日  | 満洲国及中華民国へ出張を命ず                   |
| 17年11月16日  | 帰朝                               |
| 18年3月31日   | 人文科学研究所研究担当を命ず 依願人文科学研究所員を免ず     |
| 18年2月27日   | 京都帝国大学評議員を命ず                     |
| 19年7月8日    | 心理学講座分担を免ず                       |
| 20年9月28日   | 任学生主事 兼任京都帝国大学学生主事               |
| 20年10月15日  | 補学生部長                            |

京都大学教育学部紀要Ⅳ

21年1月20日 依願評議員を免ず  
21年2月12日 逝去

木村素衛教授著作目録

1. カント一般歴史考 其他(カント著作集13)(訳) 岩波書店 大正15年10月30日発行
2. フィヒテ全知識学の基礎 其他(哲学古典叢書6)(訳) 岩波書店 昭和6年1月30日発行  
(岩波文庫版上巻昭和24年6月6日;下巻昭和24年8月20日発行)
3. フィヒテ(西哲叢書) 弘文堂書房 昭和12年9月18日発行
4. 国民と教養(教養文庫) 弘文堂書房 昭和14年7月17日発行
5. 表現愛 岩波書店 昭和14年9月30日発行
6. 独逸観念論の研究 弘文堂書房 昭和15年12月20日発行
7. 美のかたち 岩波書店 昭和16年2月25日発行(角川書店版 昭和22年12月10日発行)
8. 形成的自覚 弘文堂書房 昭和16年11月30日発行
9. 草刈籠 弘文堂書房 昭和17年3月25日発行
10. 国家に於ける文化と教育 岩波書店 昭和21年2月15日発行
11. 雪解(随想集) 能楽書林 昭和22年2月10日発行
12. 教育学の根本問題 黎明書房 昭和22年10月15日発行(増補再版 昭和24年4月30日発行)
13. 花と死と運命(アテネ文庫) 弘文堂 昭和23年3月25日発行
14. 教育と人間 弘文堂 昭和23年12月25日発行
15. 紅い実と青い実(アテネ文庫) 弘文堂 昭和24年3月15日発行
16. 魂の静かなる時に 弘文堂 昭和25年10月20日発行